

東日本大震災を経験して感じた「^{まんが}萬画の力」

株式会社街づくりまんぼう
代表取締役社長 木村 仁



1. マンガを活かしたまちづくり

石巻市は宮城県の北東部、東北地方最大の河川・北上川の河口部に位置し、古くから舟運、海運による交通の要衝であったことから商業集積地として栄え、近年においても漁業、水産業、造船業、商業等を軸に仙台市に次ぐ宮城県第二の都市として賑わいをみせていました。しかし、モータリゼーションの進展に対する中心部の道路や駐車場等の立ち遅れ、郊外型大型店舗の進出による市街地の空洞化、また核家族や少子高齢化による定住人口の減少等により中心市街地の存続が危ぶまれるようになりました。

このような状況の中、平成7年7月に宮城県出身の漫画家・石ノ森章太郎先生が石巻を訪れ、当時の市長と会談する機会があり、元気がなくなってきた石巻市を再興する起爆剤として、石ノ森先生の全面協力のもと「マンガを活かしたまちづくり」の話が浮上しました。石ノ森先生は県北の中田町（現・登米市）出身で、学生時代に映画を観るために自転車で片道数時間かけてよく石巻に来ていたそうです。しかし数十年ぶりに来た石巻の街には当時の活気あふれる様子はなく、寂しい姿に変わっていたことを残念に思い、自分のマンガで街を元気にできないかと申し出てくれたのです。

それはとてもありがたい提案ですが、新たな取り組みを行うには市民の合意形成が不可欠で、さらにお金もかかります。当時の石巻市においては、まず衰退した基幹産業にテコ入れすべきという意見が大半を占め、産業の衰退、人口減少によって税収も減る中で「マンガでまちおこし」という新たな施策に踏み出す余裕はなかったというのが現実でした。

しかし石ノ森先生が全面的に協力をしてくれる、

さらに石ノ森先生が代表を務めるストーリー漫画家の親睦団体「マンガジャパン」に所属する漫画家の先生方（ちばてつや、水島新司、矢口高雄、里中満智子、モンキー・パンチ、やなせたかし先生ほか多数の先生方）が石巻のまちおこしに協力をしてくれるというのだから、これを逃したら石巻が元気になれる機会はないんじゃないか、このチャンスを何とかものにしようと思志が立ち上がり市民運動を始めました。しかし、そう簡単に市民の理解は得られませんでした。現在でこそ全国各地でマンガやアニメを活用した様々な地域活性化事業が行われ、実際に効果を出している地域もありますが、今から26年前は「マンガでまちおこし」というコンセプトはほとんど理解もされず、「マンガなんかでまちおこしができるものか」、「税金の無駄使い！」などと罵声を浴びせられたり、活動を妨害されたりすることもありました。それでも、「マンガを活かしたまちづくり」の可能性を信じ、仲間の輪を広げ、賛同者を増やすために様々な活動を行いました。

このような活動をしていた時に意識していたのが「マンガ的発想」です。これはマンガの活動の中で生まれた造語で、「先入観や固定観念にとらわれない自由な発想」という意味です。実際には起こらないことや絶対にできないことでも、マンガの中でのいとも簡単にできてしまいます。言わばマンガは「何でもアリ」の世界なのです。このような何でもアリの自由な発想で面白いことをやっていくことが大切であり、それこそが「マンガを活かしたまちづくり」に通ずるものだと考え、市民自ら参加するマンガ仮装イベント、中心市街地2kmにも及ぶ日本一長いテープカット、子供たちからマンガを使った商品

化のアイデアを募集し優秀なものを本当に商品化するコンテスト、また現在では考えられないような豪華さなのですが、街中の空き店舗を使った石ノ森章太郎、ちばてつや、里中満智子、モンキー・パンチ、矢口高雄の合同原画展など、市民と一緒に知恵を出し、汗をかいてウェーブを起こしてきました。

このような活動が実を結び、平成9年3月に石巻市が「石巻マンガランド基本構想」を策定し、夢の実現に向けてさらに進み始めました。その後も様々な取り組みを行いながら賛同者を増やし、“さざ波”だったマンガの活動は着実に広がり“大きなうねり”へと変わっていきました。

平成11年7月に石巻マンガロードに「サイボーグ009」像が完成、平成12年に「田代島 MANGA あいランド」がオープン、そして平成13年7月23日に念願の石ノ森萬画館が完成し、マンガの活動の拠点として動き出しました。無理だと思われていた“夢”が叶った瞬間でした。石巻の「マンガを活かしたまちづくり」は、まちを元気にしたいと想う人たちの熱意と、マンガの可能性を信じて活動してきた人たちの汗が原点にあります。

2. まち全体がマンガのミュージアム

石ノ森萬画館は3階建てで、1階には総合案内、グッズショップ、トキワ荘紹介コーナーなどがあります。スロープを進むと映像ホールがあり、萬画館でしか観ることのできない映像作品「シージェッター海斗特別編」、「龍神沼」、「消えた赤ずきんちゃん」を上映しています。さらにスロープを上って2階にいくと常設展示室と企画展示室に辿り着きます。常設展示室ではサイボーグ009や仮面ライダー、人造人間キカイダーなどの代表作が立体的に展示されている他、貴重な原画も展示してあり、石ノ森ワールドを存分に味わうことができます。企画展示室では年に4~5回程度の特別展を開催しており、石ノ森作品に限らず人気のマンガやアニメの展示を観ることができます。3階は6,000冊の漫画本と300本の

映像を自由に観ることができるライブラリー、マンガに関する創作体験ができるマンガ工房、カフェになっています。萬画館は今年(2021年)7月に開館20周年を迎えました。これまでに年間約20万人、開館以来約356万人もの方々に来場いただいております。石巻の賑わい創出に大きな貢献を果たしています。



写真1 石ノ森萬画館の外観

萬画館に来ると目を引くのが特徴的な外観です(写真1)。宇宙船をイメージした球体をしています。これは石ノ森先生がデザインしてくれたもので、石ノ森先生がキャラクターたちと宇宙船に乗ってやって来て「マンガタン」に着陸し、石巻を元気にするためにキャラクターたちが街中に散らばっていくというストーリーを描きました。この「マンガタン」という名称も石ノ森先生が名付けてくれました。石ノ森先生が石巻を一望できる日和山から萬画館が立つ中州を見た時にニューヨークのマンハッタン島に形が似ていると言って、以来この中州を「マンガタン」と呼ぶようになったのです。

萬画館のロゴに英字が併記されていますが、よく見ると「ISHINOMAKI MANGATTAN MUSEUM」と書かれています。石ノ森萬画館を日本語に直訳すると「ISHINOMORI MANGA MUSEUM」になるのですが、あえてこのような英字表記をしているのには理由があります。それは「石ノ森萬画館だけがミュージアム」ではなくて「まち全体がマンガのミュージアム」という考えからこのような表記にしています。



写真2 仙石線マンガタンライナー



写真3 マンガロードのブロンズ像

仙台駅から石ノ森キャラクターがラッピングされた列車「仙石線マンガタンライナー」(写真2)に乗って来ると「石巻駅マンガステーション」に到着。駅舎には所狭しと石ノ森キャラクターが装飾され、改札近くではサイボーグ009と仮面ライダーが出迎えます。駅を出てからは石巻マンガロードを歩いて石ノ森萬画館へ。マンガロードには、石ノ森キャラクターのフラッグや等身大モニュメント、ブロンズ

像(写真3)、漫画家ギャラリー、ロボコンのマンホール等が設置されており、楽しみながら散策できるようになっています。また萬画館のみならず、市街地各地でマンガのイベントが開催されるなど「マンガのまち」として大いに賑わいを見せていました。

3. 東日本大震災

石ノ森萬画館を中心に行ってきた石巻の「マンガを活かしたまちづくり」は順調に進み、全国的にも成功事例として知られるようになってきましたが、開館から10年を迎えようとしていた平成23年3月11日、あの東日本大震災に見舞われました。

地震が発生した時に私は石巻魚市場近くの食堂の2階で昼食をとっていて、突然激しい揺れを感じました。2日前にも大きな地震があって無事だったのでまた大丈夫だろうと軽く考えていましたが、収まるどころかドンドン揺れが激しくなり、「これはただ事ではない！」と思い机の下に潜って床に這いつくばっていると、目の前の床がヒビ割れ、階下に落ちるんじゃないかと命の危険を感じました。しばらくの間必死に耐え、揺れが収まるとすぐに外へ飛び出して避難しました。

萬画館にいるお客様とスタッフが心配で、すぐに電話をしましたがつながりません。急いで自分の車で萬画館に戻ると、お客様と職員が避難した後で職員1人が残っていました。ホッとしたのも束の間、目の前を流れる北上川の水位が今まで見たことのないくらい下がっていたのに気づき、瞬時に「津波が来る！」と思いました。残っていた職員と「津波来るから早く逃げるぞ!」、「鍵をかけたらずぐに行きます。先に行って下さい!」、「わかった、すぐに来いよ!」、「はい!」といった会話をし、私は車で高台の日和山へ向かいました。すると街中が渋滞していたので、私は咄嗟に方向転換して川岸の道を通っていきました。河口からはすでに巨大な津波が向かってきているのが見え、無我夢中でアクセルを踏み込みました。坂道を登り始めると、すぐさま津波が押

し寄せてきましたが、間一髪のところ助かった…。地震から約 50 分後のことでした。

日岡山から萬画館が建つ中瀬を見下ろすと、すでに中瀬は津波に飲み込まれ、萬画館だけがポツカリと浮かんでいるように見えました。そして船や建物、おびただしい数の瓦礫等が次々と萬画館にぶつかっていきます。市街地に目をやると、かなりの高さの浸水に見舞われていました。残った職員がどうなっているのか…。何度もメールと電話をしましたが応答がなく、夕方になってやっとメールが返ってきました。「大丈夫です。約 40 人の避難者と萬画館にいます」。言葉にならないほどの嬉しさと安堵感が込み上げてきたのを今でも覚えています。

残った職員は避難せずに萬画館に残っていました。津波が来るといってもこんな大きい津波が来るとは思わず、津波の様子を撮影したり地震で落ちたものの片付けをしようとしていたりしていたところ、「ゴオーッ」という地鳴りのような音とともに瓦礫がガラスを突き破り濁流が館内に押し寄せてきたのです。慌ててスロープを駆け上がり 3 階のベランダへ出たところ、近くの内海橋に取り残された人たち約 20 人を発見。一旦津波が引いたタイミングで萬画館に誘導しました。その後、次々と押し寄せる津波に流されてきた人たち約 20 人を萬画館へ誘導し、約 40 人で避難生活を送りました。全員が自衛隊に救助されたのは震災から 5 日目のことで、それまでの間、萬画館の喫茶店にあった僅かな食料をみんなで分け合い、食いつないでいたのです。

震災から 3 日後にやっと水が引いたので、私は瓦礫や船の上を歩いて萬画館へ行きました。その景色は写真で見たことがある「戦後の焼け野原」を連想させるものでした。割れたガラス扉から館内に入ると瓦礫が散乱し、床は汚泥で覆われ、中 2 階の映像ホールにまで浸水した跡が残っていました。水面から 6 メートルの高さです。石ノ森先生の原画が心配で恐る恐る収蔵庫に入ったところ、浸水はおろか 1 枚の原画も落下することなく無事でした。石ノ森先

生が守ってくれたのだと思いました。

それからは職員や家族の安否確認に奔走し、1 週間ほどで全員の無事を確認。これだけ多くの犠牲を出した大災害にも関わらず、職員とその家族全員が無事だったことは奇跡的なことで、本当に運が良かったと思います。

3 月 20 日頃から徐々にスタッフが集まりだし、萬画館を埋め尽くしている瓦礫や汚泥の撤去を始めました。自宅が被災しているにも関わらず萬画館の片付けをするために職員たちが集まり、先の見えない不安の中、途方もない撤去作業をみんなで力を合わせて黙々と行いました（写真 4）。



写真 4 瓦礫の撤去作業（2011. 3. 27.）

そんな中、3 月 31 日に職員を集めました。萬画館の運営ができない現状では、雇用を継続することは出来ないのでは、断腸の思いで全員に解雇を言い渡しました。でも、みんなは笑顔で頷いてくれました。解雇になったにも関わらず、次の日も、その次の日、そのまた次の日も、みんな片付けにやってくるんです。私は絶対に萬画館を再開させ、またみんなでやり直すかと心に誓いました。

撤去作業に明け暮れる中、4 月中旬には瓦礫や汚泥がだいぶ片付いてきて途方もない作業に灯りが見え始めた頃、みんなで話し合い、毎年ゴールデンウィークに開催していた「春のマンガタン祭り」を

開催することにしました。あの当時は被災者の多くは避難所で生活をしており、子どもたちも不憫な生活を強いられていました。大人たちは復旧作業に追われて忙しく、車も流されていて子どもたちはどこにも連れて行ってもらえない。せめて子どもの日くらいは近くで元気に遊べる場所を作りたい、そんな想いで5月5日だけイベントを開催したところ、予想をはるかに上回る6,000人も集まり、たくさんの人たちの笑顔を見ることができました(写真5)。元気を与えるつもりが逆に元気をもらい、いつになるかわからないけれども萬画館を再開して、またたくさんの人たちに喜んでもらいたいと思いました。



写真5 春のマンガタン祭り (2011.5.5.)

4. 石ノ森萬画館の再開

春のマンガタン祭りが終わり、萬画館を完全に閉鎖することになりましたが、その後も全国各地の方々から数えきれないほどの激励や萬画館の再開を望む声や寄付をいただきました。その甲斐あって震災から1年後の平成24年3月に萬画館の再開が承認され、同年秋に石ノ森萬画館が再開することが決定しました。正直言って、こんなに早く再開できるとは思っていませんでした。というのも現地では未だ多くの人々が避難所生活を余儀なくされ、被災した会社や店舗も再開の見通しが立っていないところ

がほとんどでしたから。そんな中、生活に直結しない萬画館が多額の修繕費をかけて再開することを疑問視する人がいたのも事実で、一部のマスコミからは再開することを叩かれたりもしました。私自身も本当にこれで良いのかという気持ちも少なからずありましたが、でも被災地では全ての人たちがそれぞれのフィールドや立場で一生懸命できる限りのことをしている中で全てが同じように進めることはできない、できるところから再開して、とにかく復興に向けて全力で頑張ろうと考えました。

そして平成24年11月17日、石森プロ様やお世話になった漫画家の先生方をはじめとする大勢の関係者と3,000人を超えるファンの皆様に囲まれて石ノ森萬画館は華々しく再開を果たすことができました(写真6)。



写真6 石ノ森萬画館再開 (2012.11.17.)

5. メディアの力

萬画館が再開して最初の特別企画展は「メディアの力 マンガの力」というテーマで開催しました。それは東日本大震災で地元のメディアに助けられ、その必要性を強く感じたからでした。

地震発生から地震や津波の状況や避難情報、安否情報といった必要な情報をタイムリーにかつ継続的に伝えたのは「ラジオ石巻」でした。停電と利用集中で通信網が機能しない中、ラジオ石巻に助けを求

める SOS メールが続々と届き、それを全力で伝えました。津波によって電気の供給が止まっても、放送基地を変え、予備バッテリーや発電機を使って放送を行いました。そしてその後も長きにわたって生活に必要な情報や人々を勇気づける情報を提供しながら被災者に寄り添い励まし続けました。ラジオから聞こえる生身の声が、どれほど被災者を救ったことでしょうか。

「石巻かほく」は、親会社である河北新報社の協力により震災からわずか3日後の3月14日に復刊しました。震災の影響によって数週間にわたって戸別配布ができなかった地域も多かったため、震災の記録を広く伝えるために、震災発生から1カ月分の石巻かほく紙面を縮小版としてまとめて読者に配布しました。また被災者から聞き取りした体験談をまとめたコラム「私の3.11」は、震災から3カ月が経った2011年6月から9カ月にわたって100回連載されました。

「石巻日日新聞」は津波によって輪転機が水没し新聞の発行ができなくなってしまいましたが、「今、伝えなければ地域の新聞社の意味がない」という信念のもと手書きで壁新聞を作って避難所やコンビニ等に貼り出し、被害の状況や避難所情報、全国からの支援の様子などを伝えました。この壁新聞は復刊するまでの6日間にわたって続けられました。後にこれらの壁新聞は「6枚の壁新聞」と呼ばれ世界的に有名になりました。震災から6日後の3月17日にA4判コピー新聞を発刊。さらに輪転機が動かせるようになって復刊したのは3月19日でした。復刊第1号の1面トップ記事の大見出しは「皆でがんばっぺな」。石巻弁で“皆でがんばろう”という意味の言葉です。方言は見出しにはあまりそぐわないと言われていますが、未曾有の震災に耐え抜く市民に前を向く力、そして社員自らも新聞人として職務を貫く言葉を意味しており、この言葉に勇気をもらった人は多かったと思います。

未曾有の大災害の状況下で人々を救ったのは、ラ

ジオや新聞といった古くから親しまれてきたメディア、いわゆる「オールドメディア」でした。昨今、日進月歩の勢いでデジタル化が進み、情報の速さ、情報量の多さといった優位性からインターネットやSNSといった「ニューメディア」が普及していますが、奇しくも震災をきっかけにオールドメディアが見直されました。なかでも地域に密着した地元メディアが有する永年蓄積された経験やノウハウからくる情報力や企画力、ネットワーク力への住民の信頼は厚く、地域にとってなくてはならない財産であることが再認識されました。また震災の時に折れそうな心をつないだのも、情報を提供するだけでなく、人々に寄り添い、勇気づけてくれた地元のメディアの力でした。

6. 萬画（まんが）の力

震災を経験し「メディアの力」を再認識した一方で「マンガ」も一つのメディアと捉え、マンガを活かしたまちづくりを進めている石巻において、何ができるのか、何をすべきかを考えるようになりました。そこで思いついたのが、マンガの特性である親しみやすさ、わかりやすさを活かして、震災に関するマンガを制作し、この震災の出来事を多くの方に知ってもらい、いつ来るかわからない次の災害に備えてもらうおうということです。

震災では多くの犠牲者が出て、広い範囲にとつもない被害を受けましたが、一言で「震災」と言っても、人数だけのドラマがありました。その全てをマンガにすることはできませんが、できる限りマンガを通して残し伝えようと「石巻からの情報マガジン『マンガッタン』」を発刊することにしたところ、これまでのマンガの活動を後押ししてくれた漫画家の先生方や出版社の他、多数の方々が協力をしてくださいました（図1）。

収録した作品のテーマは多岐にわたっています。漁師の体験談をもとに震災当日の様子をリアルに紹介する話、壊滅的な被害を受けて一時は再開をあき



図1 石巻からの情報マガジン「マンガッタン」

らめたがボランティアや周囲の人々に勇気づけられて再開した飲食店の話、実際にボランティアに参加した人の体験談といった実話を漫画化したものや、震災からの復興をテーマとしたフィクション作品、もともと石巻に伝えられてきた民話や歴史ものなど全61作品を全てオリジナルで制作し収録しました¹⁾。「マンガッタン」の発刊をきっかけに、石巻が歩んできた歴史と当時の人々が注いだ情熱や想いをマンガで表現したいということになり、石巻市からの依頼で「マンガで知ろう 石巻史」を発刊することになりました。本書では、石巻の繁栄の礎を築いた北上川改修工事を紹介する「川村孫兵衛伝」、石巻市に実在する日本最古の木造建築様式の旧石巻ハリストス正教会教会堂を紹介する「十字架は見てきた」等全6作品のマンガの他、残されている地名から石巻の魅力を探るコーナーも収録しました。



図2 石巻カレー全集

さらには地元の飲食店が考案したレトルトカレーとマンガをコラボして商品化させた「石巻カレー全集（全8巻）」（図2）、地元の醸造所とコラボした「サイボーグ009 調味料シリーズ（全9種類）」を企画して販売するなど、書籍にとどまらず様々な形でマンガを活用してきました。

東日本大震災から10年経った今年（2021年）、震災伝承交流施設「MEET 門脇」で上映する映像を制作しました。震災当時に子どもだった方々6名の体験談をもとに仙台在住の漫画家・井上きみどり先生に描き下ろしていただきました。中には親や兄弟が犠牲になられた方もいて制作するのとても辛いものでした。でも一番辛いのは本人たちではなく、辛い思いをしてまでも「伝えたい」という思いがヒシヒシと伝わってくるのです。井上きみどり先生のタッチは柔らかく、子ども向けマンガにも見えます。辛い内容でもタッチを変えることで入り込みやすくなるのもマンガの特徴です。また、これらのマンガの制作中に声優や音響スタジオの方々が協力してくれることになり、出来上がったマンガに声優さんたちが声を吹き込み、音響スタッフが編集してくれてとても素晴らしい作品に仕上がりました。今後は動画サイトでの公開や書籍化などの展開もしていきたいと考えています。

7. おわりに

石ノ森先生は1989年「マンガ日本の歴史」の描き下ろしスタートにあたって、マンガに新たな定義が必要だと考えて「萬画宣言（まんがせんげん）」を發表し、自らの職業を「萬画家（まんがか）」と称しました。一昔前は「マンガは娯楽でしかない」と言われていましたが、石ノ森先生は「萬画宣言」の中で「マンガはあらゆる事物を表現できるすぐれたメディアである」とし、マンガの中で様々な先鋭的な表現方法を試し、幅広いジャンル（ヒーロー、SF、ギャグ、時代、歴史、少女、アダルト、ファンタジー、絵本など）を手掛けて数多くの作品を世に送り出してきました。生誕70周年を迎えた2006年に角川書店から刊行が開始された「石ノ森章太郎萬画大全集」は全500冊で770作品、総ページ数12万8千ページという他に類を見ない規模で、2008年に「一人の著者が描いたコミックの出版作品数が世界で最も多い」としてギネス世界記録に認定され、まさに自らが提唱した「萬画宣言」を、身をもって実践されたと言えます。

石ノ森萬画館ができる前の市民運動をしていた頃、「マンガの可能性」を市民に理解してもらおうと活動をしていました。あれから26年。萬画館がオープンし、震災を乗り越えてきましたが、まだまだマンガを活かしきれているとは言えません。

マンガを活かしたまちづくりは、「まちを元気にしたいと想う人たちの熱意と、マンガの可能性を信じて活動してきた人たちの汗が原点」にあります。

私たちは、変わらぬ熱い想いとこれまでの経験を活かすとともに、石ノ森先生が提唱した「萬画宣言」の精神を受け継ぎ、これからもマンガの可能性を広げ、石巻を元気にするために知恵を出し、汗をかいて新しいことにチャレンジしていきたいと思っています。

補注

- 1) 「マンガタン」は、石巻市内の小中学校や図書館等の公共施設に設置している他、石ノ森萬画館にて販売していますが、現在は KADOKAWA が運営する web サイト「コミックウォーカー」にアップされており、無償で読むことができるようになっています。コミックウォーカー【マンガタン・デジタル】

<https://comic-walker.com/mangattan-digital/>